【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

①話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
②書くこと	概ね良好な結果であった
③読むこと	概ね良好な結果であった
④言語事項	やや課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

本校の特徴的なことについて

- ・最も正答率の高かった設問は漢字の読み、続いて話し合いでの発言について説明したものを選択する設問であった。
- ・最も無解答率が高く、正答率の低かった設問は、小説で「吾輩」が「黒」をどう評価し、どう接しているかを捉え、自分の考えを表現する設問であった。
- ・文において、主語を選択する設問に関しては、全国の平均正答率よりやや正答率が高かった。

分析

1. 全体的な傾向及び全国との比較

全体的な傾向として、概ね良好な結果であった。全国との比較において、言語事項の領域については、2年前と同じく、やや課題が残る結果であった。語句の意味や敬語に関する設問の正答率は全国の平均正答率と比べ、差が見られた。

2. 分析に対する課題

多くの設問において、全国の平均正答率に比べ、やや下回っていることを考えると、基礎的な国語力の向上のための取り組みが必要である。語彙を増やすことに加え、文脈における意味を捉え、問われていることを正確に読み取り、過不足なく答えを記述する力をつける必要がある。

3. 国語についての意識・授業での重点的な取り組み

- ・語句の意味を調べたり、覚えたりすることに加え、実際に語句を正しく活用できるようにする。
 - ・他者の文章の構成の工夫を捉え、自らも構成・用法・表現の効果を考え、表現できるようにする。
- 語句や文章を正確に読み取るための言語活動や、意図に沿って適切に表現する活動を工夫して取り入れていく必要がある。

(領域ごと)

①数と式	やや課題が残る結果であった
②図形	やや課題が残る結果であった
③関数	概ね良好な結果であった
④資料の活用	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	やや課題が残る結果であった
③記述式	やや課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

本校の特徴的なことについて

- ・最も正答率の高かった領域は「関数」で、全国平均正答率とほぼ同じくらいである。
- ・最も正答率が低かった領域は「図形」である。特に「平行四辺形の条件を用いて説明する」設問において全国平均正答率を下回り、差が見られた。
- ・「関数」の領域に関しては全国平均正答率を上回る設問が見受けられたものの、その他の領域は全国平均正答率を下回り、無解答率も全国との比較において差が見られた。

分析

1. 全体的な傾向及び全国との比較

全体的な傾向として、やや課題が残る結果であった。全国との比較において、「関数」、「資料の活用」の領域については、概ね良好な結果であった。しかし、記述式問題の正答率は、全国平均正答率を下回り、差が見られた。

2. 分析に対する課題

全国平均正答率と比べて、「図形」の領域の正答率に課題が見られた。記述式問題の正答率が極端に低く、読み取った情報を正しく理解し、説明や表現するという力が定着していないと考えられる。また、「数と式」の領域において、「考察の対象を明確に捉える」ことの正答率は比較的高いが、「その意味を読み取り、事柄が成り立つ理由を説明する」ことの正答率が低いことから、文字や数式が表す意味を正確に読み取り、自ら理解したことを表現し、正しく説明する力をつける必要がある。

3. 授業での重点的な取り組み

- ・知識技能の定着に加え、課題解決能力の育成に向け、既習事項を活用する学習活動を取り入れる。
- ・論理的に思考し、課題解決に向けた道筋を自ら見通すことができるようにする。
- ・問われている事柄が何かを問題から正確に読み取り、問われたことを正確に説明したり、過不足なく記述したりする学習活動に取り組む。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

- ・正答率は、ここ数年間大きく変化することもなく、ほぼ横ばい状態である。
- ・教科別では、国語・数学ともに一昨年度より若干下回ったが、ほぼ横ばい状態で伸び悩んでいると判断できる。
- ・無解答率は全国平均よりやや高く、全国学力・学習状況調査が開始された平成19年度からみると減少傾向にあるが、ほぼ横ばい状態である。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

- ・学力高位層は、一昨年度より若干減少したが、大きく変化することもなく、ほぼ横ばい状態だと判断できる。
- ・学力低位層は、一昨年度より若干増加したが、ほぼ横ばい状態だと判断できる。
- ・エンパワー層は、一昨年度より若干増加したが、ここ数年間大きく変化することもなく、ほぼ横ばい状態である。

昨年度(令和2年度)は新型コロナウイルス感染症のため、全国学力・学習状況調査は中止された。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

1. 基礎学力・既習事項の定着

- ① テスト1週間前からの「総合的な学習・学活の時間」の活用
 - ・学力低位層、特にエンパワー層を底上げする取組みを行う。
 - ・家庭学習の定着化を図るために自己管理能力を身につける取組みを行う。(いま未来手帳・まなびログの活用)
- ② 定期的に基礎学力に関する小テストを実施
 - ・国語は漢字、語句に関する小テスト、数学は計算問題の小テストを行う。
 - ・小テストで一定の基準に達していない生徒対象の学習会を行う。
- ③ 定期考査の活用
 - ・前もって生徒達に出題する単元を予告し、既習事項の復習をさせ、テストの内容に織り込む。
- ④ 長期休業中の学習会の実施
 - ・国語、数学、英語を中心に取り組む。学力低位層の中でも、より厳しい生徒に焦点を当てる。

2. 言語活動の充実

- ① 言葉を使って「書く」力を伸ばす取組み(国語科)
 - ・表現の課題を設定し、記述活動に取り組む姿勢を育てる。
- ② 事柄の特徴を考え、数学的な表現を用いて「説明する」力を伸ばす取組み(数学科)
 - ・条件を変えて考察する場面を設定し、数学的に表現する活動に取り組む姿勢を育てる。
- ③ 言語能力や読解力、情報活用能力を伸ばす取組み(すべての教科)
 - ・日常の場面で複数の情報から課題を見つけ出し、書いて説明する活動に取り組む姿勢を育てる。

3. 授業方法・内容の工夫と改善

- ① 分割授業の推進(数学科) … スクールサポーターの入り込み
 - ・全学年で行っている習熟度別の分割授業をより早い時期から実施する。今年度は1学期から実施。
- ② ペア学習やグループ学習の定着(ユニバーサルデザインを取り入れた授業) ※感染症対策に配慮する
 - ・グループやペアでの学びを組織し、「学びあい」を定着させる授業方法を研究・実践していく。
- ③ ICTを効果的に活用した授業の推進
 - ・「一斉授業」「個別学習」「協働学習」それぞれの学習場面を相互に組み合わせた学びの場を形成する。

4. 学校全体としての取組み

- ① 朝の帯時間の活用 … 読書タイムとして設定する。テスト1週間前は朝学習の時間とする。
- ② 学校時程の見直し … テスト前などに小テストなどを行う時間を設定できる時程を検討していく。